

# お寺の社会性

生臭坊主のつぶやき

## 九

### 竹中尚文

#### 1. さようなら

また、お葬式の話である。またかと思いながらも、坊さんの話にお付き合い願いたい。

お葬式の弔辞に「さようなら」という言葉が気になる。先日のお葬式でも耳にして気になった。ホントに「さよなら」って言っているの？ また、会ったらどう言うのだろうか。

かつてのお葬式での弔辞は、吹き出しそうな文章もあった。本人は言葉に酔うような感じで読み上げているが、どこかで聞いたようなフレーズだと思えば、演歌の歌詞だったりした。また、ある時は「暑い夏の日、あなたは私に冷えたビールを飲ませてくれた。あの時のやさしさに、私は今も感謝している」と読み上げたその人

は、アルコール依存症であった。

張り詰めた悲しさの中で、そうした弔辞は緊迫感を和らげる働きもあったかもしれない。今はそんな弔辞もすっかり耳にすることがなくなった。決まり切った定型文を読み上げるような、味気ない弔辞が幅をきかせるようになった。その中で、何か自分の言葉で語りかけようとして、「さようなら」という言葉が飛び出してくる。

告別式と言うのは別れを告げる式ではないかと、おっしゃる方もおいでだろう。だが、私は告別式とは云わない。お葬式と言う。お葬式と言うのは「とぶらふ」のである。「とぶらふ」とは、「とむらう」ことであり「たずねる」ことでもある。すなわち、お葬式は、

生と死について尋ねることである。私の知る坊さんは誰も告別式とは云わない。

一方、最近は「お別れの会」というのが流行っている。先日、友人が電話をくれた。恩師が亡くなったので、お葬式に行った。そうしたら「お別れの会」だったそうで、彼はずいぶんと違和感を覚えたと言う。まず、手を合わせたいのだが、そんな雰囲気ではない。長男が付けた戒名もどきが掲げてあったそうだ。火葬の後、お骨を拾ったのかと尋ねると、拾ったそうだ。私の友人は、あんなことでいいのだろうか、少し憤っていた。

お骨を拾って帰ったら、そのお骨をどうするのだろう。たとえ散骨をするにしても、それはある種の宗教行為であろう。どうせ宗教行為を始めるのなら、それなりの教理や思想を伴った宗教がよからう。新たな人生観に出会うチャンスかもしれないのに。

私は、友人の憤りに共感を覚える。それは、「お別れの会」って

亡くなった方がかわいそうだなあと思う。自分が死んでいくなかに、みんなから一斉に「バイバイ！」って言われたら、さみしいだろうなあと思う。一人、舟でこぎ出したら、岸边からみんなで一斉に石を投げつけられるようなものだ。「お別れの会」というのは、生きている人たちのことしか考えていない儀式であるように思う。

そうすると、お葬式をすれば亡くなった方のことを考えているのかと言われると、必ずしもそうではなからう。「とむらい」の中に、人間の死とその人生をどれ程に考えているのだろうと、疑問に思うこともある。それは形ばかりの儀式に過ぎないと思うこともある。多く人はそうしたお葬式が大半だろうと思われるかもしれない。ところが、そんなものではない。私が出会ったお葬式の大半の場合は、大切な方が亡くなった悲しみとその人の死と生についてのこされた人々は思いをめぐらせている。

儀式の様式にかかわらず、大切な方の死という時に会って、その時だからこそ人間の生と死について考えてみて欲しい。

## 2. 人間関係

「さよなら」という言葉を少し考えてみたい。日常生活の中で、「さようなら」という言葉はよく使う。学校から帰る時、先生に「さようなら」と言っても違和感はないだろう。恋人とデートの後、「さようなら」と言うのかな。学校に行くのに家を出るとき、「さようなら」と言うことは少なそうだ。

「さよなら」という言葉が使われるのは、その状況と人間関係がかなり反映されているように思う。お葬式においてもそうだろうと思う。

私の人生でたいへんにお世話になった方は多いが、亡くなった方は少ない。その少ない中の長尾雅人先生の人生は今も私を導いてくれる師である。辻岡昭臣師の言葉は今も私の指針とな

ることが多い。共に今を生きる私の大切な存在である。

”tuesdays with Morrie”  
(Mitch Albom /published by Doubleday) 『モリー先生との火曜日』(別宮貞徳訳/NHK 出版)はとってもいい本である。その中でモリー先生は死を前にしてかつての学生ミッチ・アルボムに人生とは、死とはという特別講義を火曜日ごとにする。その特別講義の記録のような本である。映画化もされジャック・レモンの遺作になった。いい映画だった。まだ見ていない人には、DVDにもなっているので、お勧めだ。原作の本は全米のベストセラーであった。死を受け入れる人生を描いた。死を伴わない生はない。死が人生に意味を与える。単に亡くなった人の思い出を大切にするという話ではない。亡くなって往かれた方の生と死が、今の私の人生に寄与してくれているというのである。

そんな関係においては、亡くなったからと言って「さよう

ら」とは言わない。

とは言いながらも、本当に大切にしている人が亡くなったので、自分がしっかり生きていくために別れの言葉を告げる人に出会うこともある。ずいぶんとタフな方だなあと試みてみる。

### 3. 悲しい話し

先日、妻が友達と出かけた。帰ってきて「今日はとても悲しい話し」を聞いたと言う。

妻の友人で嘉田さんと言う人がいる。嘉田さんの友人に木田さんがいる。木田さんご夫婦には、一人息子があつた。勉強がよくできて首都にある大学に進学して、卒業後は公職に就いたそうだ。ご夫婦にとっては科挙に通つた自慢の息子と言うところだつた。その息子さんが交通事故で亡くなつたそうだ。

木田さん夫婦は、「神も仏もない」と嘆いたそうで、悲しいお別れの会を開いたそうだ。悲しみの中で暮らす内に、木田さんの奥様

は癌で亡くなつたそうだ。夫は、妻のお骨を息子と同じ沖繩の海に散骨したという。

この話の悲しさは子供を亡くす辛さである。さらに悲しいことに息子さんの死が生かされなかつたことである。木田さんご夫婦は仏と成つた息子さんに会えなかつた。息子さんがご夫妻の人生を導くことなく、奥様は亡くなられたのである。

息子さんが仏と成つたと言うことなど、分からないではないかとおっしゃる方もおいでだろう。見えないことは存在しないと言うことだろうか。肉眼で見えないものは、他にもある。心が見えるだろうか？命が見えるだろうか？思いやりが見えるだろうか？人生が見えるだろうか？

大切な方が亡くなって、失望感にさいなまれ、悲しみの底によんでしまう。大切な方が亡くなつたからといって、別れではない。仏となつたその方との出会いによって、その命を私が受け継いでいくのである。

「神も仏もない」と嘆いた木田さんはどのような宗教観をお持ちだったのだろう。

よく「家内安全」と言うお札らしきものを見かけることがある。私の願いや要求を聞き入れてくれるのが、神や仏なのだろうか。初詣にたくさんの人々がお参りをするのは、そのような宗教観かもしれない。たしかに人々の願いや要求を受け付けてくれる宗教施設は多く存在する。

一方で、加持祈祷はしないが人の悲しみに寄り添い、その出来事に共に向き合う宗教もある。そこに新たな人生観に出会うこともある。そうした宗教も私たちの社会で、決して少数派ではない。しかし、教会のドアを押したり、お寺の門をくぐる人は多くない。

数年前に、スマートフォンが売り出された。新たに携帯電話を購

入しようかと思う人は、携帯電話かスマートフォンかの選択をした。そしてスマートフォンが売れている。通信機器の進む方向を決めたのは消費者の選択だった。

同じようにこれから社会が宗教に対していかなる選択をするのだろうか。次世代にどんな宗教を残していくかを決めるのは、社会の一人ひとりの選択である。私はカリスマのある宗教者がリードしていく社会であって欲しくないし、何の思想思索も伴わない幼稚な宗教儀式のみが残るようにもなって欲しくない。